

第3章

コートジボワール諸部族の実態

前章ではコートジボワールの部族構成を概観したが、それに引き続き本章では下記の8つの部族をとりあげて、その実態をより詳細に比較、検討することにする。

- (1) ディダ族 (No.20:表2-1の部族番号, 以下同じ)。
- (2) ベテ族 (No.19)。
- (3) ゲレ族 (No.22)。
- (4) グロ族 (No.36)。
- (5) エブリエ族 (No.12)。
- (6) バウレ族 (No.3)。
- (7) ジュラ族 (No.43)。
- (8) セヌフォ族 (No.51)。

60以上も存在するコートジボワールの諸部族のなかから上記の8つの部族を選択した理由は、これらの部族については筆者の問題関心に則した資料をたまたま入手しえたということにすぎない。しかし結果的には、コートジボワールで等しく部族とよばれている集団の内実をある程度まで反映した選択になりえたと筆者は考えている。

本章でとりあげる8つの部族の比較、検討の資料として使用した文献は下記のとおりである⁽¹⁾。

- (1) ディダ族

Emmanuel Terray, “L’organisation sociale des dida de Côte d’Ivoire,”

Annales de l'Université d'Abidjan, 1969, Série F, Tome 1, Fascicule 2.

ディダ族に関してE・テレ (Emmanuel Terray) が調査を行ったのは1964年11月から65年8月までの約10カ月である。厳密な意味での実態調査は、ゾコリエ (Zokolié) 村を中心に、そこに1965年2月から6月までの4カ月間、住み込んで行われた。

(2) ベテ族

Denise Paulme, *Une société de Côte d'Ivoire: hier et aujourd'hui: Les Bété*, Paris: Mouton Co., 1962.

調査は、コートジボワール独立の2年前、すなわち1958年、6カ月間、コートジボワールに滞在して行われた。彼女が調査を行った時点において、ベテ族に関する文献は植民地行政官の手になる簡単なモノグラフや植民地軍のレポートなど2, 3のものを除けば皆無に近かったという。

(3) グレ族

A. Schwartz, *Tradition et changements dans la société Guéré*, Paris: ORSTOM, 1971.

調査は1965年1月から12月までと、67年1月から7月までの2回にわたって行われている。

(4) グロ族

Cl. Meillassoux, *Anthropologie économique des gouro de Côte d'Ivoire*, Paris: Mouton & Co., 1964.

A. Deluz, *Organisation sociale et tradition orale: les Guro de Côte d'Ivoire*, Paris: Mouton & Co., 1970.

グロ族については、1958年、フランスの学術調査団が調査を行った。ここではこの調査団に加わった2人の人類学者Cl・メイヤス (Cl. Meillassoux) とA・ドゥリュ (A. Deluz) が、このときの調査の成果として、それぞれ別々に公刊した上記の2つの報告書を利用した。なおドゥリュは1958年の調査団に参加したのち、単独で1964年、65年と2度にわたっていずれも数カ月間、再び現地調査を行い、彼女の著書にはその成果も含まれている。

(5) エブリエ族

G. Niangoran-Bouah, "Les Ebrié et leur organisation politique traditionnelle," *Annales de l'Université d'Abidjan*, 1965, Série F, Tome 1, Fascicule 1, pp. 51-89.

本章で利用した文献で唯一コートジボワール人の手になる論文である。この論文に含まれているエブリエ族に関する情報がどのような方法によって収集されたのか説明されていないが、既存の文献は皆無に近く、またその情報の性格からして、主に著者自身が1960年代に実施した現地での聞き取り調査によって発掘されたものであろうと推察される。なお著者はコートジボワール国立大学教授である。

(6) バウレ族

Ministère du Plan, *Etude régionale de Bouaké 1962-1964*, 1965.

ここでバウレ族の検討のために依拠した資料は、コートジボワール計画省が1962年から4年計画で実施した国内各地域（全国を6つの地域に区分）の総合調査のひとつ、ブアケ地方に関する調査の報告書である。このブアケ地方に関する調査報告書は、全4巻の本報告書と11冊の資料からなる膨大なものであるが、ここでは本章の関心に則して、本報告書の第1巻「植民」(le Peuplement) を主に利用した。なおこの巻にまとめられた調査には、ド・サルベルト＝マルミエ夫妻 (Ph. de Salverte-Marmier, M.-A. de Salverte-Marmier) ほか、2人の社会学研究者、地理学と統計学それぞれの専門家各1名が参加しているが、ここではマルミエ夫妻が執筆した「植民の諸段階」を主に利用した。この調査全体は、1962年3月から63年10月までの20カ月をかけて行われている。

(7) ジュラ族

コング王国については、L.G. Binger, *Du Niger au Golfe de Guinée par le pays de Kong et le Mossi*, Paris: Librairie Hachette et C^{ie}, 1892 (この書全体の内容については、原口武彦「西アフリカ紀行—ニジェール川からギニア湾まで—」〈『アジア経済』第15巻第10号, 1974年10月〉で紹介している)。

コング王国崩壊後については、Louis Roussel, *Rapport démographique*, Ministère des Finances, des Affaires économiques et du Plan, Région de Korhogo, Etude de développement socio-économique, 1965. (6)のバウレ族に関する資料と同じ計画省がコロゴ地方について実施した調査の報告書である。

(8) セヌフォ族

B. Holas, *Les Sénoufo*, Paris: Presses Universitaires de France, 1957.

著者はフランスに帰化したユダヤ系の人類学者で1947年から79年の死去までコートジボワールに在住した。アビジャンの人間科学センター長、文化省技術顧問などを歴任した。調査は1946年から55年まで断続的に現地を訪問して行われた。

これらの文献は、エブリエ族のそれを除いては、人類学系統のフランス人研究者たちのフィールド・ワークの成果である。そこでまず問題となるのは、これらの文献が提示している各部族の諸様相は、いつの時点のものであるのかといういわゆる人類学的現在の問題である。ここで利用した文献は、ジュラ族に関するL・G・バンジェール(L.G. Binger)の旅行記を除けば、いずれも第2次大戦以降に行われた調査の報告である。すなわちフランス人研究者たちが直接目にした各部族の諸様相は、半世紀以上に及んだフランスの植民地支配を経たのちの状況である。したがってこれらの文献では、調査時点での各部族の諸様相は、伝統と近代の2つの要素に分解され、その合成として理解され報告されている場合がほとんどである。その場合、とくに伝統的と位置づけられている諸要素はいつの時代に形成されたものなのか、そして調査時点でそれらが現実的なものとして存在しつづけているのか、不明な場合も少なくない。とくにその時点が特定されていないかぎり、それらは植民地化直前の時点でこれらの部族のなかに存在していた諸要素であるとみなすべきであろう。

次に、ここで資料として使用した文献の著者の問題関心は、当然のことな

表3-1 諸部族の概要

部族名	1. デイダ	2. ベテ	3. グレ	4. グロ	5. エプリエ	6. バワレ	7. ジュラ	8. セズフォ
事項	Krou	Krou	Krou	Mandé du Sud	Lagunaire	Akan	Malinké	Voltaïque
1. 語系								
2. 規模	90	325 (22) ²⁾	141	85	8	780	58	302 (+260) ³⁾
1) 人口(1,000人)								
2) 部族数	68 (17) ¹⁾	(93) ²⁾	35	36	9(?)	210	?	?
3) 村落数	265 (100) ¹⁾	(800) ²⁾	?	231	50	1,587	?	?
3. 部族名	バワレ族の呼称 自称なし	一部のデイグビの 共通祖先名	隣接のウォベ族と ともにウエ族、種 民地軍が創作	バワレ族の呼称 自称なし	アプレ族の呼称 自称ツアマン	コモエ河遊漁伝承 に由来する自称 「死んだ子」の意 味	もとはマリンケ語 で巡回商人の意味 の意味	マリンケ族の呼称 でセネ語を話す人 の意味
4. 起源伝承	東部、南部はガー ナからの移住説。 南部は西方からの 移住説	共通伝承なし	共通伝承なし アロム、南か らの移住説	共通伝承なし 17-18世紀、ベテ 族、マリンケ族、 バワレ族の国から 流入	主要グループは ガーナから移入	共通伝承あり (18世紀初めガーナ から)	18世紀初めコング 北部に移入してき たマリンケ族	共通伝承なし
5. 言語	8-17種のクル語 系諸語 ヨコバエ語全土で 通用	ほぼ共通	ほぼ共通、トレア リユ他方は若干異 なる	ほぼ共通	ほぼ共通	ほぼ共通	共通	ほぼ共通、9-30 方言に分類可能
6. 政治組織	なし	なし	なし	なし	なし	あり、王 (ワレボ 首長)	なし	なし
1) 部族							コング国	
2) 部族	なし	デイグビ、首長あ り	(プロア・ドリユ) プロア	首長なし、ウイブリ 固有首長、モ モ (長老会議)	ゴト、首長 (ナナ ン) あり	首長 (ンプレスバ ン) あり、アバスア、 首長 (バンバン) あり	バイラ (?)	固有首長のグループ、 首長あり
3) 村	ドウ、首長なし、 合議制	?	ウロ	ウイブリモ	アクベ、首長 (ア クベナナン) あり	クロ、首長 (クロ バンバン) あり	—	セボ、首長あり
7. 親族組成	父系	父系	父系	父系	母系	母系	父系	父系
1) クラン	ロバ、レフリ	グレボ	トケ	ゴノン	? ?	? ?	? ?	? ?
2) リネッジ	セレ(エル母系)	コス	ニユ	グニウオ	アマンド(母系)	? ?	? ?	ナリバ
3) 家族	? ?	ゾア	メンイ、グビイ	ドシ		オロ		バギ
8. 生業	農耕、狩猟	農耕、狩猟	農耕、狩猟	農耕、狩猟	農耕、狩猟、漁撈	農耕、採金、商業	商業、織物業	農耕

(注) 1) () 内はD. Paulmeが調査対象としたグロア郡だけの数値 (1958年)。
 2) () 内はJ.-P. Dozonが調査した1972年のベテ国内在住者についての数値 (Jean-Pierre Dozon, *La Société Béte, Côte d'Ivoire*, Paris: Karthala-ORSTOM, 1985.)
 3) () 内は、国外在住者数。

がら同じ人類学的調査といってもさまざまであり、したがって提供されている情報の質、量とも部族によって異なる。しかしここではそれらを見捨てて著者の問題関心に則して情報を拾い上げた。それらを一覧表にまとめあげたものが表3-1である。筆者が各資料の検討にあたって注視した事項は、同表に示してあるとおり、(1)その部族の系譜的分類、(2)人口、集落数などその部族の規模、(3)部族名の由来、(4)その部族の起源伝承の有無、その内容、(5)言語、(6)伝統的政治組織、(7)親族組織の態様、(8)伝統的生業、である。

以下、表3-1の各事項について簡単に補足的説明を加えておく。

I 系 譜

系譜別分類に関しては、表2-2で示した『政府報告書』の6グループ分類に従えば、ここにとりあげた8つの部族はクル語系グループが3つ、南マンデ、潟湖(lagunaire)、アカン、マリンケ、ボルタ系から各1部族ということで、一応、全部のグループを網羅していることになる。

II 規 模

人口規模については、いずれも各調査の時点のものを各報告書に依拠して記した。ただしジュラ族の人口は、1962年のコロゴ地方のジュラ人人口の推計値を記した。表2-3の1988年センサスの系譜グループ別の数値からごくおおまかに推計すれば、1990年の時点では、各部族の人口規模は倍増しているものと考えられる。

セヌフォ族の人口規模については説明を要する。その他の部族の居住地は今日のコートジボワール国境内にほぼおさまっているのに対し、セヌフォ族のそれは北部国境をまたいで、今日のマリ国、ブルキナファソ国にも広がっ

ているからである。B・オラス (B. Holas) が依拠した1950年前後の政府報告書などによれば、当時のセヌフォ族はコートジボワール国内の30万人に加えて、仏領スーダン(現在のマリ国)のシカソ(Sikasso)県、ブグミ(Bougoumi)県、あわせて約15万人(シカソ県の総人口20万人の約7割をセヌフォ族とみなして)、オートボルタ(現在のブルキナファソ)のボボジュラソ(Bobo-Dioulasso)県、バンフォラ(Banfora)県、あわせて5万人、総計で25万人がコートジボワール国外に居住していた⁽²⁾。ひとつの部族が植民地境界によって、3つの国に分断されたわけである。

フランス植民地行政当局が最末端の行政単位としたとされる数個の村落のまとまりであるトリビュの数については、それが行政単位とされていただけに、エプリエ族、ジュラ族、セヌフォ族を除いては正確にその数が報告されている。このトリビュは植民地化前の各部族内の自生的なまとまりにどの程度、照応するものであったのであろうか。

ディダ族を構成する68のトリビュは、それぞれ固有の名を有している集団であったが、その集団の単位をあらわすフランス語のトリビュに相当する語は、ディダ族系諸語には存在しないという。ベテ族の場合には、植民地化後トリビュとして編成されることになるディグピ(digpi)という単位が存在していた。同様にゲレ族にはトリビュに照応するブロア(bloa)が存在している。グロ族に関しては、グロ人自身がひとつの固有名でよんでいた数カ村のまとまりがトリビュとされ、各トリビュにはトリビュ長が任命されることになったが、それに相当する職能はかつては存在しなかったと、メイヤスは記している⁽³⁾。パウレ族の場合には、パウレ族の25のメ(Mé)の構成単位であるアパスア(akpasua)とよばれる数個の村のまとまりを示す語が存在し、おそらくはこのアパスアがトリビュ構成の母体となったものと推測される。

エプリエ族の場合、この小部族は9つのゴト(goto)、50カ村から構成されていると報告されているが、このゴトがトリビュに相当し、あるいはトリビュに編成がえされたものであるのかどうかについては情報がない。ジュラ族のコング王国は都市国家であり、村落は存在しなかったが、コング市はバイラ

(gbaila)とよばれる7つの地区に分かれていた。セヌフォ族についても、トリビュにかかわる記述はないが、コロゴ県の約26万人のセヌフォ人は、それぞれ固有の名を有する17のグループから構成されていて、その最大のグループのキエンバラ (Kiembara) は、人口6万、132カ村を擁し、このグループだけでコロゴ県中央部 (la Subdivision centrale de Korhogo) を構成する13の区 (canton) のひとつとなっていたと報告されている。したがってこのグループの単位は、トリビュの規模としては大きすぎるといえよう。

以上から、植民地行政当局が最末端の行政単位として創設したトリビュという単位は、かなりの程度、各部族内の伝統的組織に照応するものであったと考えられる。

ひとつのトリビュを構成する村落数についていえば大小さまざまである。ディグ族では、2カ村で構成されるトリビュが68中15で最も多く、最大は8カ村からなるトリビュが2つ、54のトリビュの村数は、5カ村以下である。1トリビュの平均村数は3.9カ村である。ベテ族の場合は、最大は19カ村、3365人、最小のものは1カ村、398人と報告されている。ゲレ族についてはトリビュを構成する村落数についての情報はなく、グロ族の場合は1トリビュに属する村の数は、1から17カ村と大小さまざまであると報告されている。エブリエ族、バウレ族については、1トリビュを構成する村数は、平均でそれぞれ5.6カ村、7.6カ村となる。

植民地時代初期に創設されたいこのトリビュという行政単位は、どの時期まで機能していたのであろうか。それについての情報は皆無であるが、植民地時代末期に刊行された統計集⁽⁴⁾にはすでにトリビュに関する情報は存在していないところからみると、独立後というよりも、植民地時代末期にはトリビュは行政単位としては廃止ないしは有名無実のものになっていたものと推測される。

ベテ族を1958年に調査したD・ポーム (D. Paulme) も、トリビュではなくディグピについてはあるが、ベテ人の日常生活においては、ほとんど現実的な意味を失ってしまっていると報告している。

III 部族名の由来

今日、コートジボワール政府の人口統計などにも採用され、一般化しているとおもわれる各部族の部族名は、必ずしも当該部族の自称に依拠しているわけではない。それが自称と一致しているのは、ここでとりあげた8部族のうち、ベテ族とバウレ族だけである。ベテ族の場合は、この部族を構成する93のディグピのうち10のディグピ⁽⁶⁾（ポームはクランと仏訳している）で彼らの始祖として信じられているベテの名が、その他のディグピにも拡大されたようである。

ディグ族、ゲレ族、グロ族、エプリエ族、セヌフォ族の場合には、今日、一般化しているその部族名は他称に由来している。ディグ族、グロ族の場合にはバウレ族による名づけが、セヌフォ族の場合はマリンケ族、エプリエ族の場合にはアブレ族による名づけが、それぞれ一般化されることになった。このことは、部族名の一般化を行った主体が植民地行政当局であることと、植民地化の過程におけるフランス軍、行政当局と各部族との接触の順序を考えれば理解できる。たとえば、アブレ族はフランスがコートジボワール沿岸で最初に拠点を建設したグラン・バッサム周辺に居住していた住民であった。フランスの内陸部侵略の際、最初に接触した有力部族はバウレ族であった。ゲレ族の場合には、現地においてフランス軍がゲレ族より先に接触することになったダン族の住民からの事情聴取にもとづいていた。しかしA・シュワルツ（A. Schwartz）の調査によれば、ゲ（ゲレはゲの人々の意）は今日、ゲレ族（より正確にはウェ族）とよばれている部族の南端の一分枝を指す名にすぎなかった。さらに今日のゲレ族に相当する範囲の部族名は植民地化前には存在せず、今日のゲレ族とウォベ族を包摂するウェという呼称が存在していただけであるという。その意味では今日のゲレ族もウォベ族も植民地行政当局の創作物であった。しかしそれにもかかわらず植民地時代を通じてゲレ族、ウォベ族という分類の仕方と呼称は、当該住民の間にも浸透し定着してし

まったという。セヌフォ族の場合はマリンケ族による名づけであるが、フランスはマリンケ族移入民が建設したコング王国とバンジェールを通じて接触し、1889年には保護領条約を締結していた（第4章参照）。

他称が一般化した諸部族の場合、それではこれらの他称に見合う自称が、つまり当該住民にとってその範囲での一体性についての認識が、存在していたのだろうか。エプリエ族についてはツアマン(Tšamā)という自称が存在していた。ゲレ族の場合にはすでに述べたようにウォベ族を含んだかたちでウェという呼称が存在していた。しかし、ディダ族、グロ族の場合には、そのような自称は存在しなかった。つまり今日のディダ族、グロ族とよばれる範囲での一体性の認識は植民地化前には存在しなかったと考えられる。ディダ族とグロ族が今日、認められているような範囲でひとつの部族となるのは植民地化の過程を通じてであり、それは他律的に、近隣諸部族からはじかれた「……ではない人びと」のひとつのまとまりとして形成されたものであるようにおもわれる。

セヌフォ族の場合には、オラスはそのことに直接、言及していないが、それを構成する諸グループの自立性、多様性からして、セヌフォという名が一般化する以前に、セヌフォ族全体を指し示す自称は存在しなかったものと推測される。

ジュラ族の場合には、自称とも他称ともいいがたい。これはジュラ族がひとつの部族として成立する経緯の特殊性にかかわっている。ジュラは、もともとマンディング語系の言語で巡回商人を意味する語であった。18世紀初め今日のコートジボワール北東部に商人として移入してきたマンディング語系の人びとは、今日のブルキナファソ国南部のボボジュラソ(Bobo-Dioulasso)市から沿岸のアシニ(Assinie)に至る南北の通商路上に一種の都市国家ともいえるべきコング国を建設し、このルートの交易を支配するようになった。L・ルセル(L. Roussel)によれば「厳密な意味では、ジュラはコング地方を支配していたイスラム化したマンディング語族の子孫のみを指していた。しかし現実にはこの語は、その職業(商業、手工業)、厳密な意味での系譜(コング地

方出身)のいかんを問わず、マリンケ族出身のイスラム教徒一般を指すのに、今日、慣用的に用いられている」⁷⁾。このような経緯を考えると、巡回商人を意味するジュラを部族名的な意味合いで用いるようになったのは、自分たちの土地に商人として移入してきたマンディング語族系の人びとを異邦人として認識した地元民のセヌフォ族側であったものと推測される。

IV 部族の起源

部族としての起源について共通の伝承を有しているのは、バウレ族、エプリエ族、そして都市国家コングを建設したジュラ族である。それらはいずれも、起源というよりも現在の居住地への移住の歴史に関する伝承である。

バウレ族の場合、その祖先は18世紀初頭、今日のガーナの中部に位置しているアシャンティ連合王国の王位継承問題をめぐって発生した抗争に敗北して、今日のコートジボワールに逃れてきた王母アブラ・ポク (Abura Poku) とその一族とされている。この一族が追手を逃れてコモエ河(コートジボワール3大河川のひとつ)に達したとき、渡河のために王母が自分の子の1人を犠牲にしたという神話が、バウレ (バ・ウ・リィ、子供が死んだ) という部族名の由来にもなっている。

エプリエ族は一般的にはバウレ族と同じく、東方から現在の居住地に移住してきたオツォビイ (Otsogbi) という名の神話上の首長が率いてきた一族の子孫であると考えられている。しかしエプリエ族を構成する9つのゴトの一部には、異なった移住伝承を有しているものがあるという。

ジュラ族の場合は、前述したその成立の経緯からも分かるとおり、コング出身のジュラ人には、その地に移住してきたマリンケ族商人のコング王国建設の歴史が共有されている。

ディダ族、ベテ族、ゲレ族、グロ族、セヌフォ族においては、いずれも部族としての共通の起源または移住に関する伝承は存在しない。今日、彼らが

居住している地に自分たちの祖先がいつどこから移住してきたかに関しては、その村落、あるいはトリビュによって東方説あり、西方説あり、北方説ありとさまざまである。それらはこれらの部族が部族としての一体性を獲得するのは植民地時代を含めた比較的新しい時代であったことを物語っている。

ここで検討した8つの部族のなかで、共通の移住に関する伝承を完全な意味で保有しているのはパウレ族だけである。

V 言 語

各部族の言語的一体性についてはどうか。本章で利用した資料はいずれもそのことに深くかかわっていないが、領土的単位、親族的単位などに関して引用されている原語が、ディダ族、ゲレ族の場合を除いては、それぞれひとつが取り出され引用されていることから、その部族内では言語はほぼ共通であろうと推察される。また独立以後、コートジボワール付属応用言語研究所の手で、ベテ語、パウレ語、ジュラ語、セヌフォ語などについては、その言語についての語彙集などの文献が出版されていることから、これらの部族については言語的一体性が確立しているとみてよいであろう。

ディダ族の場合にはひとつの言語圏を形成していなかったとテレは報告している。たとえば東部と西部ではリネッジに相当するものが、レフリ (lefri)、ロパ (lokpa) という全く発音の異なる語で表現され両者が併記されている。8つあるいは17に細分可能なディダ族諸語が存在するディダ族内で、ヨコブエ地方の言語が共通語の地位を獲得しつつあるということも指摘されている。

ゲレ族の場合には、トレプリュ地方の言語が、その他の地方ときわだって異なっているというシュワルツの指摘があり、親族単位を表す原語には、トレプリュ地方のそれらも併記されている。

セヌフォ語については、9つないしは30の方言に細分することができる

報告されている。

VI 政治組織

ジュラ族の場合を除いては、漠然とではあるが、いわゆる部族地図が描けるようなかたちで各部族は一定の土地を占拠して居住している。というより、特定の土地に居住している住民が一部族とされたという場合もありえたであろう。コング市を除いて今日ではとくに居住地域を特定できないジュラ族は、その点では例外的な存在である。

ではその居住地において各部族はどの程度、政治的に統合されていたのであろうか。植民地化前夜、属人的ないしは属地的な意味で、あるいは両者を統合した意味合いにおいて、部族とよばれている水準で中央集権化した政治権力ないしは政治的権威が存在していた部族は、コング王国のジュラ族を除いて、本章で検討した他の7つの部族はもとより、コートジボワールの諸部族にあっては、皆無であった。

それ以前の歴史をさかのぼっても、唯一バウレ族において18世紀末のごく短い期間、ワレボ(バウレ族を構成するメのひとつ)の首長がバウレ族全体の国王としての権威を保持していたといわれているだけである。

植民地化前夜、ジュラ族を除く7つの部族で形成されていた政治的統合の範囲は、部族とよばれているもののそれよりはるかに小さく、村ないしは数個の村のまとまりの水準をこえるものはなかったといえよう。これらの村ないしは数個の村のまとまりは、次章でみるように植民地化の初期の保護領条約の締結などに登場した際には、国あるいは王国、その長に対しては国王という呼称をフランス側は与えている。しかし植民地化が確定したのは、それらの数個の村のまとまりはトリビュとよばれ、植民地行政区画に組み入れられることになったのである。

この数個の村のまとまりを代表する長が植民地化前夜に存在していたと報

告されている部族は、ベテ族、ゲレ族、エブリエ族、パウレ族、ジュラ族(コング国王をそれとみなして)、セヌフォ族であり、ディダ族、グロ族の場合にはそのような権能を担う人間も存在しなかったらしい。この2つの部族については、村の水準においてもそのような長は存在しなかったという。ただしグロ族の場合には、村およびトリビュの水準で、ウィブリモとよばれる合議制の長老会議は存在していたと報告されている。

VII 親族組織

親族的単位に関していえば、どの部族にも人類学でいう核家族、リネッジ、大リネッジないしはクランに相当する親族組織が存在していたことが報告されている。しかしそれは最大でクランに相当するもので、今日、部族とよばれている水準のものは、もちろん存在しなかった。フランス人人類学者たちの調査は、調査方法としてあらかじめ領土的単位と親族的単位とを概念的に区別して、村、トリビュを領土的単位とし、これらと親族的単位との照応関係を検討しているが、結果はトリビュの水準はもとより村の水準においても、両者が照応している場合はごく例外的である。総じて領土と親族が照応しているのは、家屋ないしは村の1区画までである。

ただしディダ族とエブリエ族の場合には、部族全体に横断的な母系の親族組織としてユル(ディダ族)、アマンド(エブリエ族)がはりめぐらされていたと報告されている。

またジュラ族、セヌフォ族の場合、ジャム(diamou)、フェレ(félé)とよばれる姓が存在し、同姓は親族関係をこえてひとつの連帯を保証するものとなっていたという。

VIII 生 業

植民地化前夜の状況としては、ジュラ族を除く7つの部族はいずれも自給自足的な農耕が主であったといえよう。狩猟については、ディダ族において、親族組織の最大の単位であるロパ(またはレフリ)は、必ず集団狩猟用の大網を所有していて、それがしばしばロパを象徴する意味をもっていたと報告されている。それだけディダ族の生産活動において狩猟は重要な意味をもっていたということであろう。バウレ族の居住地には砂金を産する地域が含まれており、バウレ族のなかには採金を生業とするものも含まれていたといわれるが、その詳細については明らかでない。

ジュラ族の場合はすでに述べたように、18世紀初頭、長距離交易に従事する商人として cong 地方に移住してきたマリンケ族の人びとを始祖としている。cong 王国の全盛期には、彼らは専ら長距離交易に携わり、一部のものは織物業を cong 市内で営んでいたと、バンジェールは記している。そして彼らの食糧は、cong 市の洛外に居住させていた彼らの奴隷たちに生産させ調達していたという。

フランスとの保護領条約を締結(1889年)してまもなく、この cong 王国はサモリ(Samori)⁽⁸⁾の軍隊の侵略を受けて崩壊する。さらに植民地化の進行とともにかつて栄えた cong を経由する交易ルートそのものも衰退し、cong 市は再び昔の繁栄をとりもどすことはなかった。交易ルートが消滅したことによって、ジュラ人は主要な収入源を失うとともに、もうひとつの収入源であった織物業も工業製品の綿布の輸入によって脅やかされるようになった。そこでジュラ族の若者たちは、より有利な商業機会を求めて、新興の都市に向かって移住していった。そのため cong 地方の人口はその後、減少の一途を辿り、cong 区(植民地化以降の行政区、cong 市を含む)全体の人口は、19世紀末の cong 市だけの人口1万5000人の半分に満たないわずか7000人に減少してしまう(1962年推計)⁽⁹⁾。cong 市に代わってフェルケセドゥグ

表3-2 各県別ジュラ族人口 (1947年)

県名	ジュラ人人口(%)
1. Abengourou	5.8
2. Abidjan	4.1
3. Agboville	9.5
4. Bondoukou	11.4
5. Bouaké	0.5
6. Gagnoa	3.8
7. Daloa	4.2
8. Dimbokro	2.5
9. Grand-Bassam et Aboisso	5.8
10. Grand-Lahou	3.2
11. Katiola	9.6
12. Korhogo	(27.2) ¹⁾
13. Man	1.8
14. Sassandra	7.8
15. Séguéla	0.5
16. Tabou ²⁾	11.2

(注) 1) マリンケ族として表示されているが、コロゴ県は、コング地方を含む県であり、この数字は、ジュラ族のそれであるとおもわれる。

2) ベテ族，セクバ族を含む。

(出所) Ministère du Plan, *Inventaire économique de la Côte d'Ivoire 1947~1956*, Abidjan, 1958, p. 27.

(Férkessédougou), コロゴ(Korhogo)など近隣の新興都市においてはジュラ族の人口は急増し、それぞれ総人口の3分の1, 両市あわせて1万2000人と、1962年時点で推計されている⁽¹⁰⁾。

ジュラ人の移住は、このような近隣の都市だけにとどまらず、コートジボワール全域の都市に拡大していった。表3-2は、植民地時代末期の各県におけるジュラ人人口の割合を示したものであるが、16の県すべてくまなくジュラ人は居住していたことが分かる。この統計におけるジュラという範疇について原資料に説明はないが、おそらく前述のルセルが提示している広義の意味のジュラ人を指しているものと推察される。すなわち、必ずしもコング地方のジュラ族の系統をひくものだけでなく、コートジボワールの北西部から

マリの南部にかけての地域を居住地とするマンディング語系諸部族（マリンケ族、バンバラ族など）出身の商人層も含まれているものとおもわれる。

いずれにせよジュラ族の場合は、商業に特化した部族として、主に農耕民からなる他の部族とは異なって土地に緊縛されない展開を示しているといえよう。

逆にその他の部族の場合には、一定の居住地域の占拠を前提としていることは、彼らが主に狩猟ないし農耕を生業としていたということである。

IX まとめ

以上、コートジボワールの60余の部族のなかから8つの部族を選び、8つの事項に関して比較検討を試みた。

この8つの事例を検討しただけでも、コートジボワールで一様に部族とよばれている集団の内実は、千差万別であることが知られよう。それにもかかわらずこれらの集団が一様に部族とよばれるに至った根拠はどこにあるのだろうか。

この点で注目されるのは、ディダ族の調査を行ったテレの指摘である。8つの事例のなかでも最も多様性、異質性を内包しているディダ族の一体性に関してテレは次のように述べている。

「……ディダ族というひとつの集合は存在する。しかしながらそれは外部からつくりあげられたひとつの分類であり、しかし当事者もその必要を感じたとき——それは比較的まれなことであるが——当事者によっても容認されているひとつの分類の産物である。……この集合は、彼らに固有の諸性格によってではなく、この地方（コートジボワール西部の森林地帯）の大部分を統合している経済交換と政治的諸関係のひとつの広大なシステムの内部において、それが占めている位置によって規定されている。ディダ族を一体化し、彼らをその隣人たちから区別しているものは、彼らに固有の

文化的特性であるよりも、この諸交換のシステムのなかで彼らが果たす機能によっているようにおもわれる。その分析だけが、コートジボワールの西部森林地帯という同質的で連続的な環境のなかで、不連続性と差異を確立することを可能にするであろう。

しかし、ここであらかじめ強調しておくべきことは、このような環境のなかでの社会的諸関係が作りだすものの性格についてである。部族の定義を構成する統合と一貫性の諸要素——言語的、経済的、社会的、政治的、宗教的諸要素——が欠如していることは、社会的諸関係の密度を減じることにはならないのである。それは、諸地域共同体がどのように小さくとも、独立し自らに閉じ込もっているということの意味しない。逆にそのこのために、諸個人と諸共同体は自らのためにさきに述べたような諸関係の網の目をつくりださねばならないのである。同質的でかつ強固に統合された一社会においては、諸個人、諸共同体の安全、結婚、経済交換の可能性は、いわば当然のこととして与えられている。』⁽¹¹⁾

テレにあっては、ディダ族をディダ族ならしめているものは、それを構成する諸共同体間で作りだされた諸関係(軍事同盟、婚姻、経済交換など)の相対的に密度の濃い網の目であるといえよう。ディダ族とは、その網の目によって確保された、諸小共同体(村、ロパ=リネッジ)にとってのいわば小宇宙であるといえよう。そしてテレは、ディダ人が日常的に真に帰属意識を有しているのは数個の村のまとまりであるトリビュどまりであるという。これがディダ族全体に対する帰属意識に転化するのには、どのような状況においてなのであろうか。そこには植民地化という現実がかかわっていたに違いない。それまではかなり流動的であった諸関係の網の目は、植民地化によって固定化し、安定化したに違いない。

そこで次章では、部族と植民地体制との関連について検討してみよう。

〔注〕

- (1) この各部族の検討作業は主に1970年代に行ったものである。その後に刊行されたコートジボワール諸部族に関する文献で、筆者の関心に則して重要とおもわれるものには、下記がある。

Claude H. Perrot, *Les Anyi-N'denyé et le pouvoir aux 18^e et 19^e siècles*, Abidjan: CEDA, 1982. アニイ族 (No. 2) の一部によって形成されたンデニエ王国の歴史。

Abbé Jean-Albert Ablé, *Histoire et tradition politique du pays abouré*, Abidjan: Imprimerie Nationale, 1978. 瀉湖諸部族のひとつアブレ族 (No. 7) の歴史。

Jean-Pierre Chauveau, *Notes sur l'histoire économique et sociale de la région de Kokumbo (Baoulé-Sud, Côte d'Ivoire)*, Paris: ORSTOM, 1979. バウレ族 (No. 3) の構成するメのひとつファアフェ (Faafoué) の居住地域であるKokumbo地方の調査。なお同書のバウレ族全体の歴史については、本章と同じくド・サルベルト＝マルミエ夫妻の研究成果を援用している。

Jean-Pierre Dozon, *La société Bété, Côte d'Ivoire*, Paris: Karthala-ORSTOM, 1985. 本章で検討するベテ族 (No. 19) に関して1973～75年に行った調査をまとめたもの。本章では主にポームの著書に依拠し、ドーズンの著書はそれを補完するために若干、参照するにとどめた。

上記の文献の著者のなかで唯一、Abléだけが当該部族の出身者で、そのほかの著者はすべてフランス人である。

- (2) B. Holas, *Les Sénoufo*, Paris: Presses Universitaires de France, 1957, pp. 19-33.
- (3) Cl. Meillassoux, *Anthropologie économique des gouro de Côte d'Ivoire*, Paris: Mouton & Co., 1964, p. 227.
- (4) Ministère du Plan, *Inventaire économique de la Côte d'Ivoire 1947-1956*, Abidjan, 1958.
- (5) Denise Paulme, *Une société de Côte d'Ivoire: hier et aujourd'hui: Les Bété*, Paris: Mouton & Co., 1962, p. 26.
- (6) ポームは、彼女が調査対象としたグロア郡だけの数値として、100カ村、17ディグピと報告しているが、ドーズンによれば、ベテ族全体の“tribu”または“sous-tribu”の数は93、村数は800～850カ村と報告されている。Dozon, *La société Bété*..., p. 27.
- (7) Louis Roussel, *Rapport démographique*, Ministère des Finances, des Affaires économiques et du Plan, Région de Korhogo, Etude de développement socio-économique, 1965, p. 12.

- (8) サモリ帝国については本書第4章参照のこと。
- (9) Ministère du Plan, *Côte d'Ivoire 1965, population, études régionales 1962-1965: synthèse*, Abidjan, 1967.
- (10) Ibid.
- (11) Emmanuel Terray, “L'organisation sociale des dida de Côte d'Ivoire,” *Annales de l'Université d'Abidjan*, 1969, Série F, Tome 1, Fascicule 2, p. 37.